KATO, K., EBASHI, S., The Sociological Study of
the Influence of Sports for Rural Communities, No.4

所謂「スポーツ村」における社会的性格(第4報)

熊本縣岩野村の實態調査から(2)

東京大學 加藤橋夫, 江橋愼四郎

1. 村に岩野におけるスポーツ活動の現況

(イ) 施設、最めに述べたように六つの谷間にできた聚落である故に、十分な体育施設がある譯ではない。その主なものを示すならば次の通りである。

小学校運動場…1,035坪、高井川部落の南端にあり、岩野村を扇形にみたれば大体その要に位置している。

部落置場…各部落では夫々の置場を設けている。50坪以上、1部落(神社の境内である)1(坪以上の幅員のある部落、2、50坪以上が4、30坪以上が7部落で狭いながらも部落で夫々工夫をして置場をつくっている。

これらの置場の他に各部落にある公民館分館でも卓球台をそなえている(10部落)又夏季には水泳ができるように、村内を流れている川の敷か所を敷きとめて天然の水泳場をつくっている。勿論、一カ所を除いてその何れもが5mにもみないのであるが、山村としてはこれもちよつとした配置で立派なプールになつてゐるのである。以上のように体育施設として、決して恵まれている状態にある譯ではないが、狭いながらも部落の置場を持つてゐること(これが設置のために各部落とも相當工夫している)即ち暇な時には容易にスポーツ活動に親しみ得るような條件を整へてゐるということは、本村の一つの特色といふことができよう。

(ロ) 現在どの程度行われているか、65歳以下の者について調査した結果であるが、男子で67名、女子では21名で、調査人員の夫々19.7%, 19.1%の者が現在もスポーツを行つてゐるのであり、文部省の調査結果と比較するならば、男子は同じであり、女子では高いことを示している(註1)これは所謂スポーツ活動であつて、運動會、或いは盆踊り大會等の参加者をも含めるならば、その数はさらに多いのである。

〔(註1) 文部省の社会体育實態調査第1集によれば現在スポーツを行つてゐる者、農業男子19.7%, 女子は17.5%である〕と述べている。

次の表は毎年本村で行われる、様々なスポーツ行事に参加する、延人員の数であるが、1949年以来毎年5,000名以上が体育行事に参加してゐるのである。行事も村民が學つて参加できる村民体育祭もあれば、また技と記算を競う青年組の陸上競技大會もあり、年を通じて多彩な体育行事が展開され、村民はスポーツの機会を楽しんでゐるのである。

第1表 体育行事参加
延人員
各町(1949~51)

1949	3,738
1950	3,078
1951	3,791

(ハ) どんな種目が行われているか、一般的によく行われている種目は、夏季の水泳は別として、男子では卓球、野球、陸上競技、排球、相撲等であり、女子では排球、卓球である。本村が比較的廣い場所をとりにくい山村である點からして、男子、女子を通じて排球、卓球がよく行われていることは、よく地域社會の實情に適した種目が行われているといふことができよう。

(ニ) 村民のスポーツに対する関心、さらに本村の住民がスポーツを行わないまでもどの程度スポーツに對して興味関心を持つてゐるかについて明かにしてみよう。

先づスポーツが好きか否かについて問うたのであるが、男子では74%, 女子では61%の者が好きであると答へてゐる。全く否定的な解答をした者は男子で6%, 女子では8.6%, 従つて中間的なあまり関心のない者が男子で20%, 女子は30.5%であつた。以上の點からすれば男子の方が女子よりスポーツにより関心があることが明かであり、男子を通じて低年齢層に愛好者が多く、年齢の進むに伴ひその割合は減少してゐる。

次に現在スポーツを行つてゐない人々を對して、スポーツを行いたいのか否かについて問うたのであるが、その結果は第4圖の通りである。これによつても如何にやりたいとする者が多いかが明になるのである。勿論やりたいとする者は女子より男子に多く、

関心度は相當高いことを示している。

更に村民は現在の村のスポーツについてどのように考えているかを問うために次の3問について解答を求めた。即ち

(I) スポーツが村の生活に必要と思うか否か。

(II) 村のスポーツの現状をみて、もつと盛にすべきか、現状でよいか否かについて問うたのである。

スポーツが必要であるか否かについては、男子では74%、女子では61%の者が必要であるとし、否定的な者は僅に男子で4%、女子で3%に過ぎない。このことは、既にこの村においてスポーツが村の生活に即して行われつゝあり、よい効果をあげつゝある結果の解答のあらわれとみることができるのである。

従つて現状に對しても、少しやり過ぎると答えた者は男子で僅かに3%、女子では4%であるに過ぎない。たゞ現状で可とする者は男子で59%、女子で62%あり、男女何れも約半数は現状でよいと解答しているのであり、現状においては(即ち生産の向上とか生活の改善等による特別の社會的、經濟的向上のない限りは)本村のスポーツは村民達にとつて満足すべき状態にあるということがいえるのであるが、このことは半面において本村のスポーツが一應の限界に來ていることを示しているとも考えられるのである。

以上は本村のスポーツの概観及び村民のスポーツについての關心意識の一半であるが、以上は概括であつて、凡ての部落において必ずしも同一の條件にある譯ではない。従つて以下において、一、二の部落について社會的、經濟的基底との關係においてスポーツがどう行われているかについて若干考察してみることにする。そのために我々は三楠部落、宮迫部落の二部落をえらんだのである(部落の關係位置については第1圖、2圖参照)

兩部落の各家別耕作地分布を比較してみるならば第5表の通りであり、五段以下の耕作地しかない農家が宮迫部落では半数以上

耕作地	三	五	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	一	計
畝	畝	畝	段	段	段	段	段	段	段	段	段	町	町	
以下	以下	以下	以下	以下	以下	以下	以下	以下	以下	以下	以下	以下	以下	
三楠	—	—	1	5	2	6	6	5	5	7	2	1	2	42
宮迫	—	1	1	3	4	1	6	2	—	3	—	1	0	22

第 5 表

72%を占めているのに對して、三楠部落は17%であり、本村全體の平均と比較をしても三楠部落の方が、宮迫部落より耕作面積が広いということができるのである。更に田畑のみならず、山林についても三楠部落の方が、宮迫部落より広い面積を持ち、15世帯の大部分が農業専業であり更に前者は荷の出荷、葉煙草、柿、栗の栽培等が可能であ

對して、後者では30世帯の中で22世帯が農業であり、その農家も収入を補うために林業と、その他伐切等の賃労働に従事しなければならぬような状態である。このような面からして當然農家全体の収入にも影響をおよぼしてくるのであり、1949年度の村民税納付額の等級別を比較するならば、第6表のようであり、三楠部落では、13等級以下は55.2%であるのに対して宮迫部落では7

等級 部落	1~1	5~8	9~12	13~16	17~20	計
三 楠	2 4.6	5 11.5	12 27.6	16 36.8	8 18.4	43 100%
宮 迫	0 0	2 7.4	4 14.8	12 41.4	9 33.3	27 100%

第 6 表

7.7%と約80%近くが含まれるのである。三楠部落ではむしろ9等級より16等級の間に61.4%が含まれ、又8等級以上にも16%が含まれているのである。このような型からするならば、宮迫部落ではこの村の中流以下が大多数であるのに対して、三楠部落では中流若しくはそれ以上が多いことが明かになるのである。

以上のような経済的な背景において、スポーツ活動の状況はどうであるかをみると、例えば現在行っている習の割合についていえば三楠部落は男子25%、女子7.1%であるのに対し、宮迫部落では男子14.8%、女子3.7%であつて三楠部落の方が多いのである。村民体育祭でも三楠部落は優位を常に占めておるのに対して、宮迫部落（楠原、福原部落と合同ではあるが）あまり成績はふるわないようである。

更に兩部落を比較して、著るしく目立つものに業態の相違がある。三楠部落は農業及び副業が全部落ほど等くなつてゐるために生活の餘暇時間も各農家が歩調を合わせることができる。例えば、この地方の慣習となつてゐる田植えこい（田植後一週間の休みをとる）やうりよき（雨降の後一日の休みをする）や或は夏季における正午より午後二時までの出休等には全部落の青年が一ヶ所に集合してスポーツを楽しむことができる。それに反して宮迫部落は農地が乏しいために、多くの青年は日傭として出勤したり、或る者は工場その他に常勤するため、青年が一定の時に一ヶ所に集合する機会に恵まれていない。したがつて多数の者が集まつてスポーツ・レクリエーションを実施することが少なくなる譯である。

岩野村全体にしてみるならば、日本の農村としてはスポーツが比較的盛んであり、その関心度も高いのであるが、村の内部を更にみてるならば以上のように部落によつて若干の差があることが明かになるのである。経済的社会的條件を反映してそこに部落のスポーツ活動が展開されているという事例をここにみるのできるのである。

5. スポーツが本村に與えた影響

4で述べたように、部落の間には多少の質的相違はあるが、村全体として通観する時、所謂「スポーツ村」といわれるに値する程度にスポーツは普及し行われているといふことができるのであるが、最後にスポーツが村の生活に如何なる影響を及ぼしているかにつき考察を試みよう。

『岩野村の歩み』の中でレクリエーション運動とその影響につき述べているが、その中でスポーツの影響に関しては次のように述べている。

- (1) 村全般に明朗な氣分が流れ、明朗のうち一致團結する氣風が生れてきた。
- (2) 体育、スポーツ、保健に関心が強くなつた。
- (3) 青年の夜遊びがなくなり、節度ある生活態度になつた。
- (4) 金錢を浪費して享樂するよりも体育をやつて楽しむ氣風が生れてきた。
- (5) 農家仕事の暇をみては互に練習にはずみ（主として夜）その練習が続けられることにより、青年のはき違えられた自由がなくなり、團結心、忍耐力、克己心が養われてきた。
- (9) 村民一般と學校、役場等との間隔は一層懸念になり、暇があれば學校にきて、体育をしたり、圖書を讀んだりするようになった。

以上のような諸點を指摘してゐる、更に別のところでは、青年のスポーツの隆盛に對し「忙しいのに運動ばかりやろうとする」「農業のことも知らずに運動ばかりしたがる」等の批判の聲も出たのであり、これらに對しては、自らの生活改善、合理化、あるいは生産技術の改良、工夫への動きとなり、スポーツやレクリエーションの普及は、生活改善への動きの契機となり、兩者は互

	男 子	女 子
身体が丈夫になる	40.0%	36.5%
わるい遊びがなくなる	19.1%	21.7%
村の融和によい	19.8%	15.2%
気晴しによい	15.8%	23.5%
仕事の能率があがる	4.0%	3.1%
その他の理由	1.3%	0

第 7 表

に平行して進展しているのである。こゝに岩野村の生活に即したスポーツ活動の展開を認めることができるのである。

以上のような諸點に關連して、我々の行つた調査に於いても若干關連する結果を見出すことができたのである。すなわち既述のように男子では74%の者が、女子では63%の者がスポーツを村の社會生活にとつて必要であると認めていることは、單に楽しみとしてのものだけではなく、何等かの良い影響を認めた上の結果がこのような支持率となつてあらわれたと考えることができるのである。何故ならば第7表で示すように、その必要な理由を掲げて

いる。これはスポーツを行うことによる影響についてではないのであるが、この理由を掲げてその必要性を支持しているという方面には、このような効果のあることを村民の一部は認めていることを示すものであろう。

岩野村で指摘した點と、我々の調査結果とを併せ考えれば、岩野村におけるスポーツの社會生活に及ぼす影響としては

- (1) 村の氣風を明朗にし、楽しく豊にする。
- (2) 村の融和を増す。
- (3) 悪い遊びに對する健全な娯樂として役立つ。
- (4) スポーツの普及は生活の改善向上を促し、または仕事の能率をあげる。等の諸點に要約することができるであらう。これを要するに本村のスポーツが生活から遊離したものとしてではなく、生活に即して發展した結果が以上のような効果をあげつゝあるといふことができるのである。

6. 總 括

以上スポーツが本村に導入せられるにいたつた要因、スポーツ普及の現状とその社會生活に及ぼす影響について述べたのであるが、スポーツ導入の契機は必ずしも經濟生活の増大というよりも寧ろ他の面にあつたのである。然し、そのスポーツが興味や記録の向上ということだけにこだわられず、そのスポーツの要求が、反つて村の生活改善や生活向上へと向つた點は本村の特色とすべきところであり、それが緩やかではあるが着実に今日における程度までに普及したのである。

然し、更に詳細に検討する時、確かに村民の大多數はスポーツに關心を持ち、多くの人々がスポーツ活動に参加しているのではあるが、必ずしも完全に村民の要求に満ちた状況にあるとは云えないのである。即ちやりたいとしてもやり得ぬ事情が介在している譯である。この點についての調査結果では

男子では仕事の邪魔になると答えた者36.7%、身体が疲れると答えた者25.9%あり、女子では仕事の邪魔になると答えた者29.4%、身体が疲れると答えた者20.5%あり、岩野村で行つた調査結果でも時間が足りぬとする者が男女とも半数以上はおるのであつて、男女いずれも農業労働者という特殊な生活條件から、スポーツは行いたくても仲々やれないと答えているのである。このような點からするならば、又本村の施設の現状（そしてこれ以上の廣場を窺ふことはむしろ不可能に近いと考えられるのであるが）からして、軽度のスポーツが考慮されて然るべきではないかということが指摘できるのであり、更に日本の農村、總てを通じていえるのではあるが、本村でもなお生活の合理化、生産技術の改善等をはかることが必要であり、そうすることによつて更にスポーツへの機会がうみ出され得るのであろう。

なおスポーツの社會生活に與えた影響については、二、三の點は指摘でき得るにしても、一般村民に普及するようになって漸く4、5年の處であつて、決定的な結論を下す段階にあるとはいえないのであり、なお數年の推移をみる必要があるであらう。

屢々指摘したように、本村のスポーツは必ずしも社會的基盤の急速なる改善に伴ひ遅かに導入されたものではないが、以後の發展の過程において、生活様式改善への動きがあらわれてゐるあり、又スポーツのみにとらわれることなく、生産改善のための研究、様々なレクリエーション活動、教育向上のための集會等々が行われ、それらの一環としてスポーツ活動が行われているのであり、又記録の優劣を競ふスポーツよりも寧ろ村民の凡てが等しく楽しんだスポーツ、すなわちレクリエーションとしてのスポーツが行われているので、この限りにおいてはなお前途の發展を期待できるであらう。そして小規模ながら、日本の農村におけるスポーツ

の典型を示すことが可能になるであろう。

(本調査昭和47年度文部省科学研究費一課題番號11,301號によるものであり、東京大學文學部、福武助教授の指導、協力を得た)

参 考 文 献

- (1) 福武直著 日本農村の社會的性格 (2) 河合悦三著 農村の生活 (3) 文部省 社會体育實態調査第一集 (4) ランド・バ
ーグ著、福武直譯 社會調査 (5) 熊本縣教育廳 若野村のあゆみ (6) Butlers:- Introduction to Community Recreation (7)
J. L. Hutchinson:- Principles of Recreation (8) M. H. Neuweyer:- Leisure and Recreation